



遠隔によるアメリカの小学校児童との国際共同企画 その1

著者	藤木 大三
雑誌名	教育学論究
号	13
ページ	117-130
発行年	221-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029959

遠隔によるアメリカの小学校児童との国際共同企画その1

Online Collaborative International Projects with American Elementary School Students Part 1

藤 木 大 三 *

Abstract

The unexpected COVID-19 pandemic has abruptly and rapidly changed the conditions of the annual two-week overseas study tour taken by the author's junior education seminar to Spokane, Washington, USA. Unlike all previous in-person tours mainly focusing upon visits to local elementary schools to share some traditional Japanese games and to play with American students, online connection was the only remaining option to maintain the framework of these tradition-rich international and intellectual opportunities.

The purpose of this study is to review online collaborative international projects created by a group of 14 junior seminar students for a total of 80 American K to 3rd grade students in two different elementary schools, Brentwood and Evergreen, both located in Spokane.

Four separate groups of 3-4 Japanese students each created and edited their own projects—Japanese expressions and writings, Traditional Japanese Culture, Modern Japanese Culture and Sceneries, and Traditional Japanese Games—along with study plans, scripts, and worksheets for the American students, and uploaded them on Google documents from February 16 to March 4, 2021. All uploaded files were later exhibited in each classroom in both Brentwood and Evergreen, and their teachers then uploaded the completed worksheet files and pictures of the American students.

キーワード：国際共同、オンライン国際交流、小学校英語教育

[1] はじめに：

我が国における英語教育の若年化は、文科省が「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を提示後、2011年度に「5年生以上」の「外国語活動」として始まり、昨年度（20年度）からはそれが「3年生以上」に引き下げられ現在は高学年での「教科」としての英語の必修化という経緯を辿っている^{注1)}。

こうした、小学校英語教育の一層の充実化に伴い、授業の担い手である教員を育成するために、特に教員養成系大学では「英語科教育法」等の教科指導のためのカリキュラム整備のみならず、普段から日常的に英語に触れる機会を学生らに提供していく

環境作りが喫緊の課題となっている。

一方、本学ではスクールモットーである「Mastery for Service」を礎とし、国内外問わず、よりグローバルな視座に立った「世界市民」の育成に力を注いでおり、2014年度からは文科省のスーパーグローバル大学事業の一環である「グローバル化牽引型大学」の一つとして、他大学以上に「海外」を身近に感じやすい学習環境に軸足を置く高等教育機関である。この「グローバル化牽引型大学」の望むべき姿として、「大学教育の国際化のモデルを示す」^{注2)}こと、また「新たな取り組みに挑戦し、日本のグローバル化を牽引する」ことが特に期待されており、国際的感覚を持った人材を育成する大学として、本学が果たすべき役割は大きいと言えよう^{注3)}。

* Taizo FUJIKI 教育学部教授

注1) 文部科学省 HP より http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf#search=文部科学省+小学校英語教育

注2) 日本経済新聞2014年9月26日 HP より http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG26H03_W4A920C1CR000

注3) ウィキペディアより <https://ja.wikipedia.org/wiki/スーパーグローバル大学>

こうした、「グローバル化」や「大学教育の国際化のモデル」の一環として、過去25年近く継続して来た本学部3年教育研究演習授業（以下3年ゼミ）での国際交流活動（ゼミアメリカ研修旅行）については既に本論文でも紹介したが^{注4)}、昨年度（20年度）末の研修は、コロナ禍に直面し例年の対面での実施は不可能となったため、その代替措置として先行研究や他の事例を基に、オンラインでの国際交流の可否について、まず検討を加えることとした。しかしながら、いわゆる COIL（Collaborative Online International Learning）^{注5)}による遠隔での大学間の国際交流や高校生同士のような同年代間による事例はあるものの、大学生と小学生のような異年齢の国際交流活動は殆ど見受けられなかった。

そこで本稿では、オンライン経由で実施した3年ゼミ生と、アメリカの公立小学校児童たちとの国際共同企画について総括し、高まる小学校課程での英語教育の担い手を育成する、本学部独自の「国際化のモデル」の実践例とすることを目的に論を進めた。

〔2〕本研究演習授業における国際共同企画概説：

（1）小史：

ここでは、今回の国際共同企画の原点とも言える3年ゼミにおける国際教育の現在までの推移について、簡単に触れておきたい。

1992年7月、米国ワシントン州スポケーン市（Spokane, Washington, USA）に位置する Whitworth University（当時は、College）の、体育学 Russ Richardson 教授（現在 University of Montana Western 教授、92年当時は准教授。）が、約1ヶ月の予定で、当時 Whitworth の日本姉妹校であった北陸学院、四国学院等の教育機関を視察訪問する途上、本学（当時は聖和大学）を訪れた。これにより、Richardson 教授自身の指導する体育学科スポーツ医学専攻学生らの海外研修プログラムと、旧聖和大学タッチフットボール部の米国遠征を合同で実施する計画が立案され、まず93年3月、37名の部員及びチアリーダーがスポケーンの地に降り

立った。そして翌94年5月には、Richardson 助教授の率いる14名のアメリカ人学生が来西することとなった。この両大学の繋がり、旧聖和大学が09年に現在の関西学院大学教育学部となつてからも継続され、1996年から2019年までの24年間で日米合わせて合計28回に及ぶ交流が実施されて来た。特に、09年以後は、現地小学校や幼稚園・保育施設等の教育機関を訪問し、子どもたちと様々な交流を図る内容へと変遷して来ている。

（2）スポケーン市との関わり：

Whitworth University の位置するスポケーン市は、本学の位置する西宮市と1961年以来国際姉妹都市関係にあり、様々な分野で交流活動が行われている^{注6)}。特に、1989年に武庫川女子大学（Mukogawa Fort Wright Institute）が現地分校を設立し、その存在は地域コミュニティにも広く認知されている。

また、両市内公立小学校11校が姉妹校提携を結んでおり、中高生レベルでの交換留学も定期的に行われるなど、教育関連での継続的な交流が顕著である。尚、Whitworth University は、1990年に旧聖和大学教育学部が姉妹校提携を結んだ経緯を引き継ぐ形で、2013年度より本学の海外協定校として認可されている。

（3）特に過去5年間に対面交流を行った現地教育機関について：

表1に2016年度から19年度までの過去5年間に3年ゼミ生が実際に現地スポケーンを訪問した折、子どもたちとの交流の機会を持った幼稚園や保育所、また公私立小学校等現地教育機関について記した。このうち、今回リモートでの交流を行った公立小学校2校について述べたい。

① Brentwood Elementary School（写真1）：

Brentwood Elementary School（以下、Brentwood）は、スポケーン市北西部、ちょうど Whitworth University メインキャンパスの裏手に位置する公立小学校で、児童数は575人（21年度現在）である^{注7)}。学校周辺は緑濃い静かな住

注4) 藤木大三、2016年、「先端的な教育学研究演習授業の実践とそのグローバル化への試み」～過去5年間の米国研修総括と今後の課題～ 関西学院大学教育学論究第8号より。

注5) 2018年度より文科省が推奨する「大学の世界展開力強化事業」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1408256.htm

注6) 西宮スポケーン姉妹都市協会編、2002年、「姉妹都市提携40年史」より。

表1 過去5年間(2016年度～19年度)の3年ゼミ海外研修における現地訪問教育機関(ABC順)

教育機関	年度	2015	2016	2017	2018	2019
保育所・託児所:						
Little Holland Daycare		○	○	○	○	○
Whitworth EC3		○	○	○	○	
公立小学校:						
Brentwood		○	○	○	○	○
Evergreen		○	○	○	○	
Sunset						○
公立チャーター校:						
Spokane International		○	○	○	○	○
私立小学校:						
Northwest Christian		○	○	○	○	○
ホームスクーリング:		○	○	○	○	○

写真1 Brentwood Elementary School
(18年度アメリカ研修より)

宅地で、近くに大規模なショッピングセンター等商業施設が点在しているものの、学校そのものは公立公園と地続きな安全な環境に立地する。Brentwoodには、2000年の当時の旧聖和大学グループとの交流時より途切れることなく訪れており、当時より主に Doug Beckman 教諭の担当する3年生クラスとの交流活動を続けている。

② Evergreen Elementary School (写真2):

Brentwood から約5キロ南下した位置にあるのが、同じ公立の Evergreen Elementary School (以下、Evergreen) である。全児童数は、21年度現在609人で、Brentwood 同様全児童の約8割が白人児童である^{注8)}。同校とは、2014年度から交流が始まり、例年中学年を担当する Melissa

写真2 Evergreen Elementary School
(19年度アメリカ研修より)

Hainline 教諭を窓口として、1年～6年クラスまで幅広く交流を続けている。

特に、新型コロナウイルス(以下、コロナ)感染が徐々に深刻化し始めた20年2月末の訪問時には、当初予定していた訪問先数カ所がキャンセルになる中、2度 Evergreen を訪れる機会に恵まれ、3～5年生クラス併せて6クラス約150人の児童らとの交流を果たすことが出来た。

[3] リモートによる国際共同企画立案とその実践:

20年3月上旬以後、それまで漸増していたコロナが、アメリカ大都市圏を中心に爆発的に広まった影響により、20年度末(21年2月下旬～3月上旬の2週間)に予定していた米国研修は事実上実現不可能となった。このため、実際の対面での研修に代わる方法として、オンライン経由による大学生と小学生との交流実施の可能性を探るべく、Brentwood や Evergreen 始め、長く交流のある現地スポケーン市の公立小学校5校に共同企画参加を呼びかけた。その際、概ね以下のような内容につき計画中であることを伝えた(資料1)。

- ①日本人学生(以下、ゼミ生)による日本文化や遊び、折り紙、日本食、スポーツ等に関する紹介。
- ②可能な限り、Zoom や Teams を用いた同時双方向型での交流の可否。
- ③現地教員撮影による児童らの活動の様子や成果、質疑応答等の動画収録。
- ④複数回(実施時間については検討中)に分けた企

注7) [Public School Review]より <https://www.publicschoolreview.com/brentwood-elementary-school-profile/99218>

注8) 同上 <https://www.publicschoolreview.com/evergreen-elementary-school-profile/99208>

資料1: Tentative ideas for shared class cross-Japan-US project

Taizo students working with elementary schools

1. Create multiple lesson plans for both the teacher and elementary kids to engage.
 - a. College students could introduce themselves and talk about favorite food/game/American sport/Japanese sport/??
 - b. Intro to origami
 - c. Intro to Japanese culture
 - d. Intro to kids games
 - e. Connect with students via stories of mask wearing when they were kids. Tell stories that wearing masks has been present in Japanese culture for years. Why?
2. Engage the US classroom through video (Zoom/Teams)
3. Possibly work with teachers to create short response videos of the class working on the projects with any questions for the students.
4. Provide feedback to students based on questions asked.
5. Work to provide four to five sessions.
6. Amount of time per Session TBD.
7. A possible challenge is how to store and engage video.

資料1 アメリカの小学校への国際共同企画についての事前案内

画の実施の可否。

⑤動画やフィードバックのアップロード方法等については要検討。

その結果として、3名(Ms. Fran King, Ms. Megan Ross、以上 Brentwood Elementary Grade K、Ms. Melissa Hainline、以上 Evergreen Elementary 3rdGrade)の現地教員より協力の承諾を得ることが出来たため、先ずゼミ生たちにより具体的な活動内容の立案を求めた結果、14人のゼミ生が4つの小グループに分かれ、それぞれ「簡単な日本語(Basic Japanese Expressions、以下 Expressions)」、「日本の伝統文化(Traditional Japanese Culture、以下 TC)」、「現在の日本(Modern Japanese Culture、以下 MC)」、「日本の伝統遊び(Traditional Japanese Games、以下 Games)」の4プロジェクトを動画やパワーポイント等を用いて作成することとなった。こうした経緯については、21年1月中旬にKing教諭とHainline教諭それぞれとZoomミーティングを行い、逐一こちらの意向を伝えつつ、より具体的な活動実施方法についての意見交換を行った。その際、アメリカ側からは、「学期中の授業に可能な限り支障を来さない活動時間、内容であること」と、特にHainline教諭からは「毎週2回(火、木曜日)の社会の授業時間に日本について学習させたい」等の要望があったため、それらに沿った形での準備や最終アップロードに向けた全体日程の調整を行なった。またKing、Ross教諭が低学年(Kindergarten = 主に5、6歳児クラス、日本では幼稚園年長クラス相当)とHainline教諭が中学年(3rd grade = 9歳児クラス)であることから、それぞれBrentwoodは低学年向

き、Evergreenは中学年向きと、二校別途の活動内容を準備することとなった。その後、Brentwood側に中学年クラスが加わり、最終的にEvergreenは中学年1クラス、Brentwoodは低中学年3クラスとなり総勢80名の児童たちを対象とした共同企画となった。なお、本小論ではEvergreen(中学年)との活動内容詳細についてのみ記すこととした。

(1) アメリカ側国際共同企画対象小学校について:

① Brentwood Project:

共同企画実施期日: 2021年3月1~4日

(米国日時、以下PST)

対象学年: Kindergarten および3rd grade

(第3学年)

児童数: K = Ms. Fran King 教諭クラス18、

Ms. Megan Ross 教諭クラス19、

3rd grade = Mr. Doug Beckman 教諭クラス22、合計59名。

実施内容: Expressions, TC, MC, Games 低中学年合計8プロジェクト 各10~15分

② Evergreen Project:

共同企画実施期日: 2021年2月16, 18,

3月1, 4日(PST)

対象学年: 3rd grade (第3学年)

児童数: 3rd grade = Ms. Melissa Hainline 教諭クラス21名。

実施内容: Expressions, TC, MC, Games 合計4プロジェクト 各10~15分

(2) プロジェクト最終アップロードまでの流れ:

次に、各プロジェクトアップロードまでについてであるが、コロナで対面での作業に制約があったため、各ゼミ生は漸次Zoom等を用いながら、各自の進捗状況を共有しつつ、Google Documentを活用しながら作業を進めることとなった。その後アメリカ側に対して完成したプロジェクトの動画リンクをGoogle Document上で提示し、それらを必要授業時に各教室で全体共有してもらった。併せて、授業時の児童らの様子を動画撮影してもらい、事前配布をお願いしたワークシートと共に再度Google Document上に返信してもらう形式で共有を図った。これらプロジェクトを、概ね20年度秋学期終了後春休み期間中(21年1月下旬~3月上旬)に実践

した。なお、特にゼミ生への英語表現に関わる全ての事項及び添削指導については、本ゼミ卒業生で現地ゴンザガ大学大学院生（Gonzaga University Graduate school）である青木大典（16年度教育学部卒、以下青木）に、また研修経験者として江頭翔太郎（20年度教育学部卒、以下江頭）に全体補助全般の協力を仰いだ。以下、動画アップロードまでの経緯について示した。

- ①日本側（ゼミ生14人＝幼児教育女子6、初等教育男子2女子4、教育科学男子2）及び青木、アメリカ側（Hainline 教諭と3年生児童21人）それぞれの自己紹介動画や写真（写真3，4，5，6）を Google document 上で共有、その後、ゼミ全体を4グループに分割、動画作成活動開始。
- ②各グループ（Expressions, TC, MC, Games）共、日英両方の指導案作成作業、青木による添削指導、江頭による漸次助言等。
- ③②に基づき、日英両方のスクリプト作成、青木による添削指導。
- ④各グループへの青木による英語表現等についての詳細指導（Zoom 経由、複数回）。
- ⑤最終スクリプト（英語）作成と通し練習（複数回）。
- ⑥最終アップロード直前確認、意見交換等。
- ⑦最終アップロード（2/16, 18, 3/1, 3/4 日本時間）。
- ⑧アメリカ側から、フィードバック動画及び児童記入済ワークシートアップロード。

なお、これら活動内容資料については、次章で各プロジェクトごとに抜粋提示した。

〔4〕共同企画の検証と考察：

本稿では特に、今回の企画全体を振り返りながら、その教育的意義や今後への課題につき考察を加えたい。

（1）指導案及びスクリプト（シナリオ）作成について：

今回の企画では、ゼミ生が編集作成した動画を単にクラウド上にアップロードし、それをアメリカの児童らに観てもらうだけではなく、個々の反応や感想をワークシートに記してもらった形式とした。それ



写真3 20年度教育学部3年ゼミ生によるアメリカの児童たちへの自己紹介の様子（Uploaded 動画より）



写真4 20年度教育学部3年ゼミ生（2021年1月）



写真5 Evergreen 小学校3年 Hainline 教諭クラス児童たちの自己紹介の様子（Uploaded 動画より）



写真6 Evergreen 小学校3年 Hainline 教諭クラス児童たち（2021年2月）

は、単に日本側大学生の英語コミュニケーション能力向上のみに主眼を置いた一方通行な企画に留まらず、アメリカの児童らにとっての学習の機会としても活用してもらいたかったからである。併せて、ゼミ生が将来教育現場へ赴いた時に、今回の「英語による指導経験」が微力でも自身の財産となるよう、指導の経緯と達成目標をより明確にすべく、各プロジェクトとも日本語英語両方の指導案の作成も義務付けた。

そうした指導案を基に、各グループ個々に児童に活動内容を明確に伝えるための手順（スクリプト）も併せて作成した。とりわけゼミ生たちは、普段から英語に慣れ親しんでいないこともあり、アメリカの子どもたちに適した英語表現に苦労したが、青木の的確な助言により最終的にはより児童目線に立った一連の手順を完成させることが出来た。それらを基に、幾度となく練習を積み重ね、アメリカ側指定の期日までに、全ての動画のアップロードを終えることが出来た。

（2）各プロジェクトについて：

表2に、過去5年間の本ゼミのアメリカ研修旅行での教育活動時、現地児童らに指導した伝承遊びについて示した。これらを基に、また青木や江頭らの助言を経て、上述した Expressions, TC, MC, Games の4プロジェクトを企画立案した。次に Evergreen 中学年向けプロジェクト概要について示した。

① Expressions 概要（資料2-1～2-6）：

担当の Ms. Hainline より送られて来た児童のネームリスト（表3）を基に、児童らが各自の名前と、クラスの友達や先生の名前、また児童らにも馴染みのある日本の食材「寿司」カタカナで書けること、さらに「ありがとう」を日本語で言えることを達成目標としたプロジェクトを企画した。授業の進め方としては、児童全員の個人名と先生、それに「寿司」

表2 過去5年間の現地教育機関での教育活動

年度	教育活動
2015	かるた、折り紙
2016	とんとん紙相撲、折り紙
2017	福笑い、折り紙
2018	かるた、折り紙
2019	とんとん紙相撲、折り紙

表3 Evergreen 小学校3年 Hainline 教諭クラス児童名簿

Student
1 Wyatt Aiello
2 Carter Briggs
3 Colton Elliott
4 Sophia Engberg
5 Grace Farr
6 Lanora Freitas
7 Addison Gilbert
8 Talon Graham
9 Suhail Ibrahim
10 Emma Rae Johnston
11 German Matveev
12 Maxton Page
13 Luke Powell
14 Xavier Ringquist
15 Tilley Rogers
16 Owen Webster
17 Olee Welch
18 Samuel Wen
19 Amara Crump
20 Jacee Sullivan
21 Landon Rostberg

をカタカナでトレース出来るようにしたワークシートを授業時に配布してもらい、各自が動画を見ながら個別に練習出来るようにした。その際、個人名を1回目はトレースしながら練習し、その後それを基に各自が自力でカタカナ練習できるよう、ワークシートに工夫を凝らした。

② TC 概要（資料3-1～3-2）：

TC (Traditional Culture:日本の伝統) は、当初は日本の正月や祝催事を紹介するべく準備を進めたが、アメリカの小学校児童の目線で考えた場合、自国の祝催事についての理解力もままならない年齢層に、見知らぬ外国(日本)の正月や行事を伝えることは想像以上に困難であることから、最終的に人力車や相撲を紹介し、また箸の使い方を実際に指導する内容での全体構成とした。

③ MC 概要（資料4-1～4-2）：

MC (Modern Culture:現在の日本) は、プロジェクトの一環として普段コンビニ等で手軽に手に入るガムや飴といったお菓子類のサンプルをアメリカへ郵送し、実際に児童らに配布試食してもらう内容から検討を始めた。しかしながら、コロナでもあり、衛生安全面への配慮から大学の周辺散策の様子を動画撮影し、クイズ形式で児童らに答えてもらう授業内容で構成した。

④ Games 概要（資料5-1～5-2）：

Games は、他の3プロジェクトと比して、英語

～ アメリカプロジェクト Lesson Plan ～

プロジェクト名： Japanese Expression

メンバー： 新藤美穂、山之内風香、横井舜太

対象児童： 3年生 Ms. Melissa's class

実施日：2/16（火）、2/18（木）、3/2（火）、3/4（木）

1. 目的

「アメリカ人の子どもに、『日本語』に興味を持ってもらうきっかけにする！」

2. ゴール

中学年：「自分の名前と友達の名前、先生の名前を日本語で書くことに挑戦する。」

3. 主な活動の流れ（導入・展開・まとめ）

○中学年

	児童の活動	教師の働きかけ・発問
導入	○ゼミ生の紹介動画を見る。 めあて 「自分の名前とクラスの友達の名前、先生の名前を日本語で書いてみよう！」	○ゼミ生の紹介動画を流す。 ○日本語で自分の名前を書いた紙を見せながら英語で自己紹介をする。 ○めあてを伝える。
展開	★メイン ゼミ生の動画を見て真似しながら、 クラスの全員の名前 を書いてみる (1人2分×21人)	○紙を配布する。 ○1人ずつの名前をカタカナで書いたスクリーンを見せ、マネして書いてみるように声をかける。 ※「This is ○○'s name spelling in Japanese!」 ※1人ずつ書けるまで動画を止めてもらう

まとめ	○身近な日本語の紹介動画を見る。 ・「スシ」を日本語で書く。 ・「アリガトウ」を日本語で言う。	○絵や写真を見せながら、日本語の紹介をする。 ・書いたり、言ったりすることを促す。
-----	---	--

4. 準備物

▼ゼミ生が準備する

- ・事前に撮影するゼミ生動画
- ・カタカナで書いた名前ボード（中学年全員分）
- ・クラスの全員分の名前を書くことができる配付資料（中学年用）
- ・カタカナで書いたなぞるボード（低学年全員分）

資料2-1 Japanese Expressions (Expressions) 指導案（日本語）

Japanese Expression Lesson Plan

Project name: Japanese Expression

Group Member: Miho Shindo, Fuka Yamanouchi, Shunta Yokoi

Target children:

- Evergreen Elementary School: 3rd Grade (Ms. Melissa's class)

Schedule:

- Evergreen Elementary School: 2/16, 2/18, 3/2, and 3/4

Objective:

- Students will be able to interact with Japanese expressions by writing their name, friends' names, and their teacher's names.
- Students will be interested in Japanese expression

Goal:

- Middle grade:
 - "Students will be able to recognize Japanese characters and write their name, their friends' name, and their teacher's name in Japanese."

Materials

- A video created by KGU students
- Slideshows including American students' name in Japanese
- Handouts
 - Middle Grade: writing their name in Japanese

Lesson Plan: Middle Grade

	Contents of video / Children's activities	Teacher's work and question
Introduction	<ul style="list-style-type: none">• KGU students will introduce themselves in English.<ul style="list-style-type: none">○ KGU students will introduce their name by showing their name in Japanese○ KGU students will show the objectives of the video <p>"Write your name, your friends' name,</p>	<ul style="list-style-type: none">• The teacher will play a video.

	and teacher's name in Japanese!"	
Main Activity	<ul style="list-style-type: none">• KGU students will show how to write American students' names in Japanese.<ul style="list-style-type: none">○ KGU students will show a couple of examples.• American students will see their names on the worksheet in Japanese.• American students will trace their names first and write their names by themselves.	<ul style="list-style-type: none">• The teacher will distribute worksheets to students.• The teacher will check students if they understand the content of the video.• The teacher will stop playing a video while students are writing their names in Japanese.
Conclusion	<ul style="list-style-type: none">• KGU students will teach how to write "sushi" in Japanese and how to say "Thank you" in Japanese.• American students will write "スシ" and say "アリガトウ" in Japanese.	<ul style="list-style-type: none">• The teacher will resume playing a video.• The teacher will encourage American students to say "Thank you" in Japanese.

資料2-2 Expressions 指導案（英語）

スクリプト

○中文字

①自己紹介 - 始めて

山之内「このプロジェクトを担当するのは、この3人です！
まずは、一人ずつ自己紹介をお願いします！」

橋井「ぼくの名前は寛大ですが、日本語ではこのように書きます。」
山之内「私の名前は寛幸ですが、日本語ではこのように書きます。」
新藤「私の名前は英樹ですが、日本語ではこのように書きます。」
（自分の名前をカタカナで書いた紙を持って、見ながら英語で自己紹介をする。）

橋井「今日はみんなに日本語に興味をもってもらいたいと思っています。」

新藤「今日の授業を楽しみです！」

（動画を区切る）

新藤「自分の名前とクラスの友達の名前、そしてクラスの名前を日本語で書いてみよう！」

山之内「一緒に進んでいきましょう！」
「子どもたちに紙を配ってください！」

紙を配ってもらう。
紙：人数分の番号が書かれてあり、番号順でクラス全員の名前を書くことができる紙
→スライド「中文字配付資料」

（動画を区切る）

②日本語で自分の名前を書いてみる。

※「あいいうえあんがく」をBGMで流す。

橋井「今から実際に自分の名前と友だちの名前、そして先生の名前を書いてみよう！」
新藤「私のスクリーンを見ながら順番にやまして書いてみてね」

（動画を区切る）

バツ音を聞きながら
音声で「This is OQ」 s name spelling in Japanese! Let's try writing this!」と言う。
アメリカの先生一着が終わるまで動画を止めてもらおう。

（動画を区切る）

③友達や日本語の紹介

山之内「みんな日本語で自分の名前と友だちの名前、先生の名前は書けたかな？」
橋井「最後に、私たちがよく使う日本語を2つ紹介します！」

（動画を区切る）

（バツ音で見せながら、読み上げる）

新藤「まず一つ目は、スシ！」「寿司は、日本の伝統的な日本料理の一つです。」

橋井「日本人は、寿司を食べる習慣があります。」

山之内「では、先ほどと同じように、自分の紙にスシと日本語で書いてみましょう！」

橋井「Let's try!」

（動画を区切る）

新藤「最後に、紙を配える言葉をみんなに覚えてもらいたいと思います。」

山之内「日本語では、アリガトウと言います。」

橋井「Repeat after me!」

橋井：「アリガトウ」 Say!（ジェスチャーをつけて）

アリガトウ子どもたち：「アリガトウ」

「Good!」

新藤「次はもっと大きな声で書いてみよう！」

山之内「Repeat after me!」

山之内：「アリガトウ」 Say!（ジェスチャーをつけて）

資料2-3 Expressions スクリプト（日本語）

Japanese Expressions :

○中文字

①Self introduction / Am

フウカ
[Hello everyone! We are students of Kansai Gakuin University from Japan!]
[We are going to show you Japanese culture today!]
[we're gonna show]

ミホ
[First of all, we will introduce ourselves one by one!]

シュンタ
[My name is Shunta. In Japanese, my name is like this.]

フウカ
[My name is Fuka. This is my name in Japanese.]

ミホ
[My name is Miho. In Japanese, my name is written like this.]

Introduce myself in English while showing a piece of paper with my name written in Katakana. ②

シュンタ
[I hope everyone will be interested in Japanese culture today!]

（ミホ：画面共有）

ミホ
[Here is today's goal!]
→ [Write your name, your friends' names, and your teacher's name in Japanese!]

フウカ
[Let's enjoy together! Teachers, please hand out worksheets to students.]

④Play the video ("Also English")

Middle grade : Have the paper handed out.
Paper : Handouts for the number of people are written, and the names of all the class members are written in numerical order.
Paper that can be used → Slide "Materials distributed to middle school students"
[@Children write their names in Japanese](#)

シュンタ
[Now, let's try to write your name in Japanese!]

Show the screen (ミホ：画面共有)

ミホ
Do you find your name on your worksheet?

Before you start writing your name, we will show you some examples!

（ミホ：スライド共有）

（見せている紙）

For example, this is "XX" name.

You can trace your name first like this.（実際にやってみせる）

when you finish tracing your name, let's write your name by yourself!

Are you ready? Let's write your name now!

If you have time, let's try your friends' names!

（"Repeat" スライド共有）

Teachers, please stop playing this video, and start playing it again when your students finish writing their names. We will show you two Japanese words next!

⑤Introduction of familiar Japanese

フウカ
Hello again! Did you finish writing your name?

Please show us what you did!（見ている感じを出す）Good/Nice job!

How was writing your name in Japanese? Did you enjoy it? Whose name was the most difficult?

シュンタ
[Finally, I would like to introduce two Japanese words!]

Hand about while showing it in PowerPoint (ミホ：画面共有)

ミホ
[The first word is SUSHI! SUSHI is one of the traditional Japanese food.]

シュンタ
[When we eat sushi, we use our hands or chopsticks.]

フウカ
[This is how to write sushi in Japanese.]（ミホ：スライド共有）

[Let's write SUSHI on your worksheet!]

[No, XX, if your students need more time, please stop this video!]

ミホ
[The second word is arigato. Arigato means "thank you" in Japanese.]

フウカ
[When we want to (say) say thank you, we say アリガトウ in Japan.]

シュンタ
[Now, let's practice it! Repeat after me!]

（アリガトウ） Say!（ジェスチャーをつけて）

アメリカの子どもたち：「アリガトウ」

「Good!」

ミホ
[Next, let's say it in a louder voice!]

フウカ
[Repeat after me!]

（アリガトウ） Say!（ジェスチャーをつけて）

アメリカの子どもたち：「アリガトウ」

「Perfect!」

⑥Conclusion

シュンタ
[How was our video? Now, everyone has become a Japanese master!]

ミホ
[Thank you so much for giving us this great opportunity!]
[We can't really meet you, but we're happy to be able to connect with you online like this.]

フウカ
[I hope you will remember "アリガトウ" and use it when you go home!]

Say「アリガトウ」 one by one.

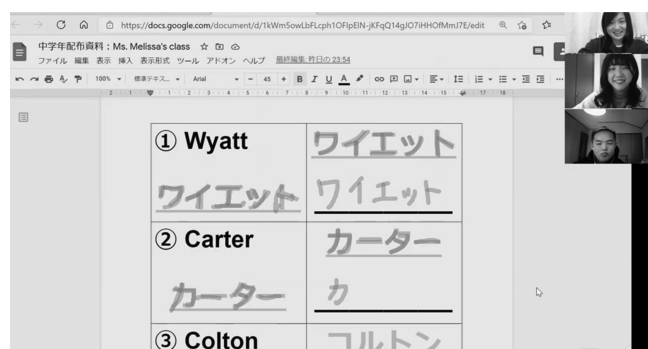
資料2-4 Expressions スクリプト（英語）

① Wyatt	ワイエット	④ Sophia	ソフィア	⑦ Addison	アディソン
ワイエット	----	ソフィア	----	アディソン	----
② Carter	カーター	⑤ Grace	グレイス	⑧ Talon	テイロン
カーター	----	グレイス	----	テイロン	----
③ Colton	コルトン				

⑥ Suhail	スヘイル	⑨ Maxton	マクストン	⑫ Tilley	ティリー
スヘイル	----	マクストン	----	ティリー	----
⑩ Emma	エマ	⑬ Luke	ルーク	⑭ Owen	オーウェン
エマ	----	ルーク	----	オーウェン	----
⑮ German	ジャーマン	⑯ Xavier	ゼイビア	⑰ Olee	オリー
ジャーマン	----	ゼイビア	----	オリー	----

⑱ Samuel	サミュエル	⑲ Landon	ランドン	Let's say "thank you" in Japanese アリガトウ！ (Arigato!) From-KGU students Fuka, Shizuka, Miko
サミュエル	----	ランドン	----	
⑳ Amara	アマラ	㉑ Ms. Melissa	メリッサ	
アマラ	----	メリッサ	----	
㉒ Jacoe	ジェシー	Sushi	スシ	
ジェシー	----	スシ	----	

資料2-5 Expressions アメリカ児童用ワークシート (Ms. Hainline's class)



資料2-6 Expressions 指導例 (Uploaded 動画より)



Japanese Traditional Culture grade 3,4

Date: / / Student Number: _____

Draw!

1. Who is wearing this vehicle?

① human ② horses ③ dogs ④ cats

2. What kind of shoes does he wear?

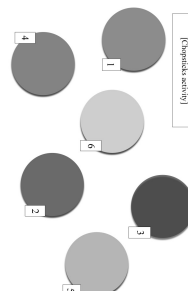
① sandals ② socks ③ boots ④ Japanese wooden "tabi"

3. What kind of sport does he play?

① Basketball ② American football ③ swimming ④ Soccer

4. What is this you can see over his head?

① ring ② pants ③ clay ④ natural hair



Let's go on a trip to Japan!



We need

- 2 pencils
- eraser
- worksheets



資料3-1 Traditional Culture (TC) 指導例
(Uploaded 動画より)



Paper Sumo Wrestlers



We want to know what you felt about today's class. Please tell us!

What do you enjoy? (Draw things)

What you want to do?

資料3-2 TC アメリカ児童用ワークシート
(Ms. Hainline's class)



Japanese Modern Culture Project: Question sheet

Name: _____

- Please write your thought and impression about a video you watched!
- Did you like it? Do you have any questions about Japan?



資料4-1 Modern Culture (MC) 指導例
(Uploaded 動画より)

資料4-2 MC アメリカ児童用ワークシート
(Ms. Hainline's class)

- What part of Japanese culture do you like the most?
- What is your favorite part?



(Rock Scissors Paper)

資料5-1 Japanese Games (Games) 指導例
(Uploaded 動画より)

表現能力以上に動作や方法を伝える活動であったため、当初は子どもたちにも比較的指導しやすいと予想された。しかしながら、コロナへの配慮から、基本的に個々の児童が教室で行える活動に限定されたため、検討を重ねた結果、最終的には二つの手遊び(「茶壺」と「グーチョキパーで何作ろう」)の授業指導を実践することとなった。

(3) 国際共同企画の教育的意義について：

今回の活動内容は、例年ゼミ授業の一環である米国研修旅行の代替措置として行ったが、結果としてコロナ以後もより柔軟に実践可能な交流方法として、一定以上の教育的効果があったものと評価できる。また、日本語や伝承遊びをアメリカの児童たちに英語を用いて指導した経験は、単に個々の英語表現力の有無にとどまらない、より「グローバルな授業指導」の実体験として、今後につながる実りある機会となったものと思われる。一方で、一口に英語での指導と言っても、そうした実体験そのものが乏しい上に、今回は特に現地小学校の実情や実際の学級の様子等全てが、オンライン経由での情報共有であったことから、ゼミ生にはかなりの時間と労力を費やす挑戦となった。また、例年の対面での研修旅行でも、事前準備段階での各自の日程調整が一番の課題となるが、今回は特に大学キャンパスに集合しての活動等が一切不可能な状態での時間調整で

What do you think?

Name: _____

1. Did you enjoy our games? Which games did you like? Please tell us your thoughts about the two games!!

2. What kind of American culture do you want to tell us?

3. What can you make by Rock, Scissor, and Paper?

Example:



Right-hand → Rock and Left-hand → Rock
Boxing!!

Thank you so much for writing your thoughts!!
Did you enjoy our games? We hope you enjoyed playing Japanese hand games!
If you have any questions, please write them down on this paper!!

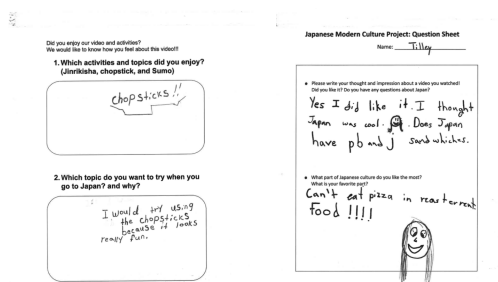
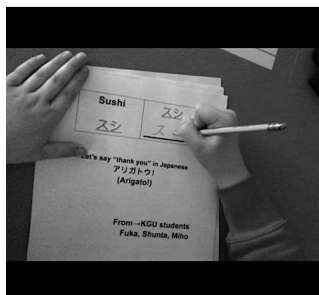
I hope we will see you soon,

Masaya, Youko, Yuuka

資料5-2 Games アメリカ児童用ワークシート
(Ms. Hainline's class)

あったため、例年以上に苦労が絶えなかったようである。しかし一方で、こうした「一つのことを成し遂げるための全員の協力」の実践は、個々の内面的な成長を促すだけではなく、多様性や協調性といった、指導者に必須の資質涵養にも有益であったものと考えられる。

さらに、本企画の骨子である「英語を用いた授業指導」においては、単に英語の具体的な表現方法の学習以上に、「(授業を履修している)児童たちの思いや目線」を意識する好機となった。例えば、授業の流れとしてのスクリプトを作成し、文法や言い回しに特に問題がなかったとしても、それを単に暗唱して動画作成するだけでは、相手(児童)に達成目標を伝えたり教えたりすることは難しい。つまり、英語を母国語としないゼミ生(日本人)が、自分たちよりもずっと幼いアメリカの子どもたち(小学校3年生)に、彼らの母国語である英語を用いて、彼らに理解出来る「授業指導」をするためには、それ相応の心構えや準備が不可欠であったということである。したがってゼミ生たちは、普段以上に大きな抑揚、また身体全体を使っのアクション等、オンラインという限られた指導環境の中、何度も練習を重ねて最終的な動画作成に臨む必要があったが、その結果として、児童らから多くの肯定的な反応や感想を得ることが出来た(資料6~7)。こうした結果を得られたことは、何よりも学生個々の自信を



資料6 Expressions 授業風景
(Ms. Hainline からの Uploaded 動画より)



資料7 児童らのワークシート記入例
(Ms. Hainline's class)

深めただけではなく、より想像力を働かせることの重要性を実体験出来たという点で、教育的に意義深い活動となったものと言えよう。

以下に、今回の活動後、学生らが特に「英語を用いた授業指導」についての感想を、一部抜粋して記した。これらから明らかなように、今回の国際共同企画を通して、漠然とした英語への不安や距離感が緩和されただけではなく、単に文法や発音等に捉われず、先ず英語で会話を交わすことがいかに大切であるかを、多くのゼミ生たちが体験出来たようである。

- ・このプロジェクトをする前は、英語で会話を交わすことに非常に緊張感や不安感を抱いていた。しかし、何より伝えたいと思って必死になって取り組んだり、笑顔で向き合っていることが一番必要だと感じた。
- ・英語も1つの言語に過ぎないと改めて感じさせられた。今まで卓上で英語を学ぶことはあったが、このような使い方をしたのは初めてだった。日本語も実際に使う際には棒読みではなく、感情を乗せて話すように、英語もそうしなければならぬと感じさせられた。子どもに対して話す際は日本語でもかみ砕いて簡単な言葉で話すように、英語もその必要があると感じた。

・英語は完璧な発音で話すことよりも、いかに自分の気持ちを載せてジェスチャーなどを使いながら自分なりに表現できるかが大事であると思った。自分の伝えたいことにしっかり気持ちを込めて伝えるようにしたい。

・英語だけに限ることではないかもしれないが、英語で伝える練習を通して文法通りに正しい英語を使って文章にして伝えることが一番重要なのではなく相手に伝えようとする思いが大切だと実感し、英語を使うことに前ほどの抵抗がなくなった。

・文法や単語が重要であると思っていたが、コミュニケーションをとるためには、「伝えよう」という熱い気持ちや間違えることを恐れずに挑戦する姿勢が1番大切であると実感した。

[5] 今後の展望 (まとめに代えて) :

本小論は、1993年春に端を発し、特に2011年度からは本学部3年ゼミ授業の一環として例年実施しているアメリカ研修旅行が、コロナで中止をせざるを得なくなったため、その言わば代替措置として試みた現地小学校との国際共同企画についてまとめたものである。近年、本学でもSGU、所謂 Super Global University としての全学的な Outbound 志向

が高まり、各学部に見合ったグローバル化の必要性が年々増加して来ている。一方で、そうしたプログラムの殆どは、学内外問わず大学生や高校生同士のものに留まっており、今回のように異年齢（大学生と小学生）同士の国際共同企画は皆無と言って良い。また、同年代ではなく異年齢同士での国際交流の場合、特に時差についての配慮も軽視出来ないが^{注9)}、Zoom や Teams 等を介した同時双方向型の交流ではなくてもオンライン環境さえ整えば、他学部に比して実習等制約の多い本学部現行のカリキュラムの範疇でも、十分交流が可能であることが明らかとなった。

一方、本小論ではゼミ生の英語表現力の有無については、特に論じなかった。その主な理由は、この共同企画の趣旨が単に個々人の客観的なコミュニケーション能力の向上ではなく、あくまでも将来の指導経験にプラスの糧を得るためであったこと。加えて、アメリカの小学生に日本の文化や言語を指導する上で、些細な英語表現や語彙力不足、また発音のミス以上に子どもたちの興味を引くような言葉がけや表情、また分かりやすく楽しいアクションを実体験することの方が大切であったためである。そうした観点に立てば、今後英語表現能力の必要性が漸増すると考えられる小学校現場において、ゼミ生らが指導者となった時に、今回各自が体験した「(細かな文法や発音に捉われないこと) 先ず英語を頻繁に用いる環境」作りを子どもたちに還元出来るはずであり、英語をより身近なツールとして用いていけることも期待出来る。

こうした「英語を使う機会」の一助として、今回の国際共同企画以後、ゼミ生らはアメリカ人大学生らとのグループ交流も複数回行った^{注10)}。この交流では、各グループがそれぞれに都合の良い時間帯に Zoom 経由での交流を行い、共有する情報等は全て自由としたが、時間調整以外に、特にお互いの意思疎通が図りづらかった等のクレームは一切無かった。従って、こうした機会が単に授業の範疇だけではなく、様々な生活シーンの中で日常化して行くこ

とこそ、多くの日本人が抱いている、漠然とした「英語に対する構え」を払拭して行ける第一歩となっていくものと思われる。

さらに、今回の国際交流を通して、学生自身が普段あまり関心を持たない日本固有の文化や遊びに目を向ける好機にもなったと考えられる。北口¹⁾は、「我が国の教育政策としての国際化は必然であり、今後は海外留学経験のある教員・保育士養成の重要性は益々増加する」と述べているが、それは単に「語学力のある」教員育成ではなく、あくまでも日本人としての感覚や繊細さを持ち、我が国固有の言語や文化、遊びを先ず理解した上での教員養成であるべきではないだろうか。そして、そうした教育観を持った指導者の養成こそが、他にはない本学としてのアイデンティティーをも高め、またグローバルな資質を培って、将来教育の現場で様々な境遇の子どもたち一人一人を受け止め、彼らを導き育てていく指導者としての素地になるのではないだろうか。

今後は、今回のようなオンラインでの国際交流を、既存の海外研修に準備段階から導入したプログラム作りを試行しながら、学期を通してアメリカの子どもたちとの定期的な交流の機会を持ち、より汎用性のある新たな国際共同企画の進め方について総括的な研究を進めて行きたい。

【謝辞】

本小論をまとめるにあたり、次の方々の協力を得た。先ず、元ゼミ生である青木大典君（16年度教育学部卒、現在 Gonzaga University Graduate School）には、ゼミ生の英語表現全般及び指導案作成等、専門的見地より丁寧な助言指導をいただいた。また、江頭翔太郎君（20年度教育学部卒、21年度秋より Gonzaga English Language Program 留学予定）からは、昨年度のアメリカ研修経験者として、有益な情報提供をいただいた。さらに、Evergreen 小学校の Ms. Melissa Hainline、また Brentwood 小学校の Ms. Fran King、Ms. Megan Ross、Mr. Doug Beckman 各教諭はじめ児童ら80人には、本共同企

注9) 今回の現地協力校 Evergree 小学校の位置する北米ワシントン州スポケーン市 (Spokane, Washington, USA) と日本の時差は±17時間。さらに、「社会」の授業時は現地時間午前10時～10時半（日本時間翌日午前2時～2時半）であったため、同時双方向での交流には限界があった。

注10) 今回の交流以後、21年3月10日～4月21日にかけて、Whitworth University 基礎日本語クラス履修学生18人とゼミ生14人が7つの小グループに分かれ Zoom や Instagram 等を活用しながら、簡単な日本語指導を交えてジャンルや時間等全て自由に交流を行った。

1) 北口勝也、2009、「教員養成における海外留学の役割～武庫川女子大学 文学部教育学科 MFWI プログラムの成果と展望～」武庫川女子大学大学院今日医学研究論集 第4号 pp61.

画実施において多大な協力をいただいた。ここに記して、心よりの謝意を表します。

[参考文献・資料・注釈等]

- ・ 藤木大三、2016、「先端的な教育学研究演習授業の実践とそのグローバル化への試み～過去5年間の米国研修総括と今後の課題～」関西学院大学教育学論究、第8号。
- ・ 広島大学 Hp, 『小学校国際理解教育における国際交流学習の効果』 https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/2/29851/20141016173001980048/AnnEducRes_38_41.pdf
- ・ 北口勝也、2009、「教員養成における海外留学の役割～武庫川女子大学文学部教育学科 MFWI プログラムの成果と展望～」武庫川女子大学大学院教育学研究論集第4号。
- ・ 文科省 HP, 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」 https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf#search=文部科学省+小学校英語教育
- ・ 同 HP, 「大学の世界展開力強化事業～COIL～」, https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1408256.htm
- ・ 日本経済新聞2014年9月26日 HP http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG26H03_W4A920C1CR000.
- ・ 財)日本国際交流センター HP, 「ITを活用した日米交流の状況」 http://www.jcie.org/japan/j/pdf/cn/j-us_grassroots/5.pdf
- ・ 西宮市スポケーン姉妹都市協会編、2002年、「姉妹都市提携40年史」。
- ・ Public School Review, 2021, 「Brentwood Elementary School」, <https://www.publicschoolreview.com/brentwood-elementary-school-profile/99218>
- ・ 同「Evergreen Elementary School」, <https://www.publicschoolreview.com/evergreen-elementary-school-profile/99208>
- ・ ウィキペディア、「スーパーグローバル大学」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/スーパーグローバル大学>